



文責：山田

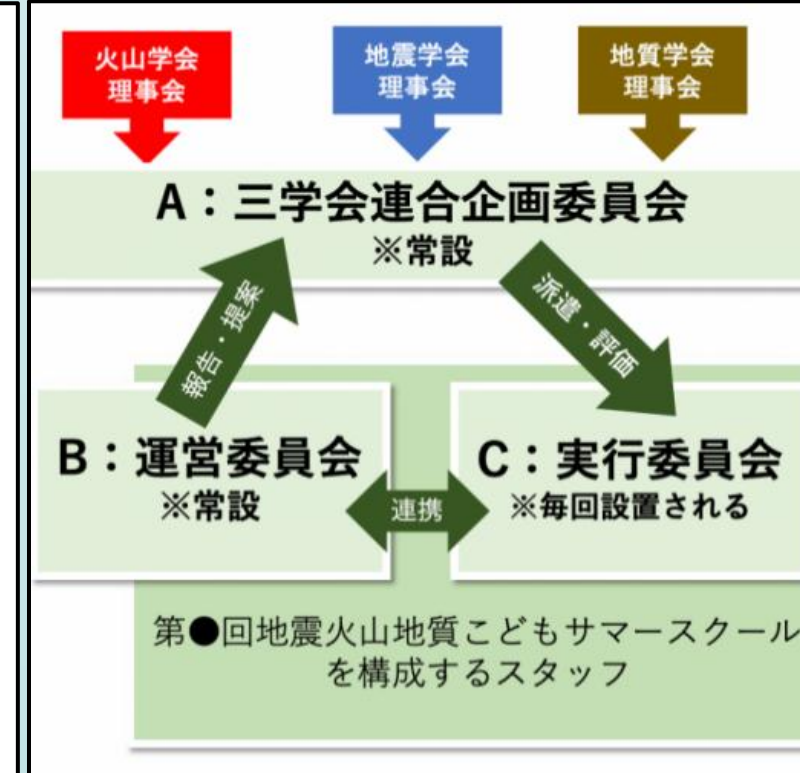
次世代向け教育プログラム 「地震火山地質こどもサマースクール」の活動内容とその意義

普及行事委員会

▶ 地震火山地質こどもサマースクールとは？

27年間、地震・火山・地質の3学会が全国で実施してきた、異色の**こども科学ワークショップ**

・日本地震学会と日本火山学会が中心となり、**1999年から**毎年夏休みに全国各地で開催してきた行事。
・災害と自然の恵みを実感できる「ジオパーク」の運動が国内でスタートしたことを受け、2011年からは日本地質学会も加わり実施。
・組織は、3学会の理事会と直結する「**地震火山地質こどもサマースクール運営企画委員会**」と、参加するコスタッフによる「**運営委員会**」、開催地の地元組織などと作る「**実行委員会**」で構成。3学会の幹事学会は**日本地震学会**である。



開催意義

開催当初の**理念**と参加者の考える**意義**

★**理念は？**：ここからはじまった

サマースクールの根本理念(桑原;1999)

- 1)研究最前線の専門家が子どもの視点にまで下り、地震・火山現象のしくみ・本質を直接語る
- 2)災害だけでなく、災害と不可分の関係にある自然の恵みを伝える

★**学术界における意義を調査**：アンケートを実施(中川・柴田;2022)

実施方法：Googleフォームを対象者にメールで案内。(5月4日～16日)
対象者：参加時か現時点で職業研究者である89人(大学64、国研・自治体研15、博物館6、民間研4)(故人3人を除く)
回答者：**77人**(回答率86.5%)

参加のきっかけ

多い順に

- ・**学会員としての社会貢献**
- ・地元として声をかけられたから
- ・楽しそうだから
- ・付き合いで
- ・自己成長の機会となりそうだから
- ・自身の研究を紹介できるから

(複数回答可、2名以上を参照)

参加しての感想

多い順に

- ・**社会や地域への貢献につながった**
- ・**子どもたちとの対話に知的刺激**
- ・地球科学の底上げに貢献した
- ・研究につながる発見があった
- ・学会員としての使命を感じた
- ・不満が残った

- ・成果の共有、見える化が不足
- ・スタッフの問題
- ・参加人数
- ・詰め込みすぎ
- ・準備不足
- ・日程
- ・手法そのもの
- ・回答を誘導している
- ・自分たちとは違う、学会に場所貸しただけ

これまでのこどもの参加者数(延べ)：845名

これまでの開催地地図



2026年は**宮城県気仙沼市**で開催予定

第25回
地震火山地質
こどもサマースクール
In気仙沼

これまで3学会からの負担金に加え、以下の助成を受け、実施
土屋生涯福祉基金(2000年有珠)、静岡県(2003年講師負担)、阪神・淡路大震災10周年記念事業、防災教育チャレンジプラン実践事業(2004)、子どもゆめ基金(2007-08、10-16)、益城町(2017)、大島町(2018)、きょうと地域創生市民会議(2019)、公益財団法人セコム科学技術振興財団(2022)、ノビエグリーン財団(2023-24)、休眠預金など活用事業(2025)

参加動機感想

学会が主催する意義

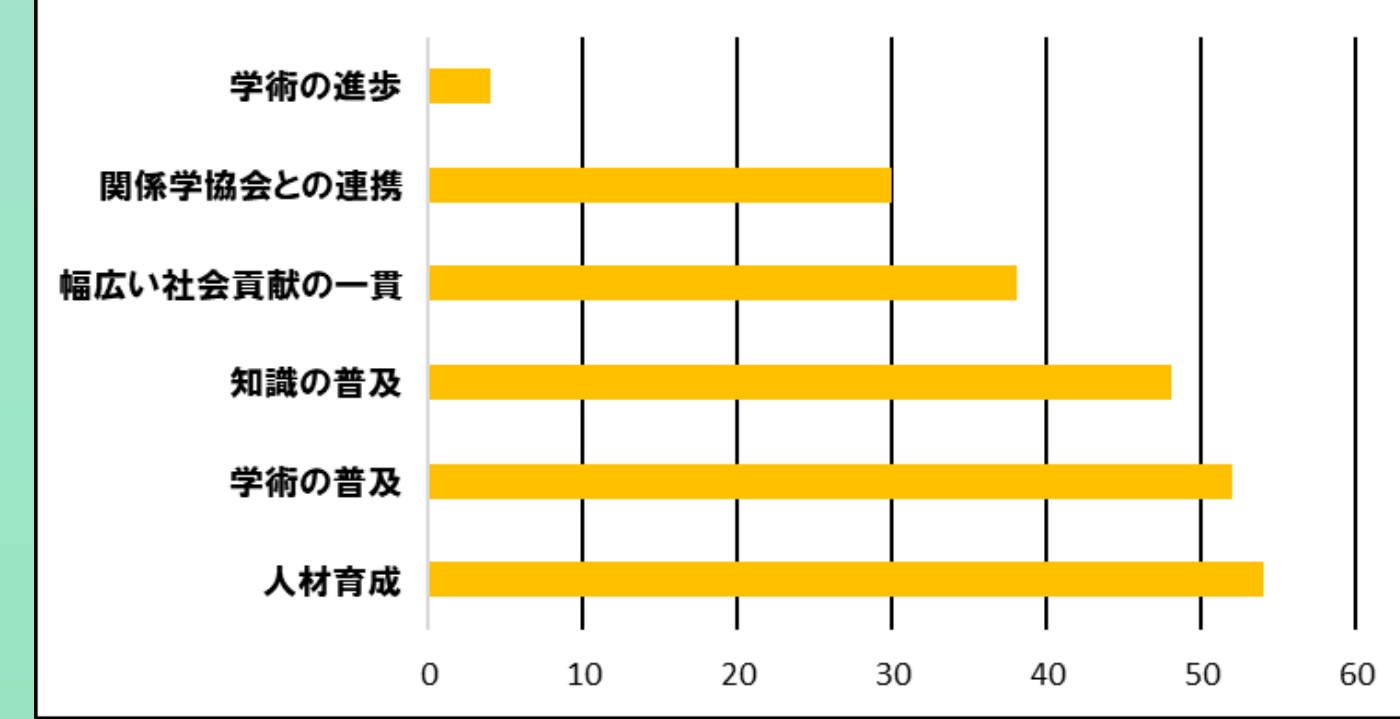
学会が主催する意義とは

選択肢の内容で多い順に

- ・**人材育成**
- ・**学術の普及**
- ・知識の普及
- ・幅広い社会貢献の一貫
- ・関係学協会との連携
- ・学術の進歩

(複数回答可、2名以上を参照)

学会が主催する意義とは？



学会が主催する意義とは(具体的に)

(一部抜粋)

- ・地球科学は特に教科書の内容が大きく書き換わることが多く、学術団体の専門家の参加は重要。
- ・机上のアウトリーチではなく、若手の地球科学者が一般の方や子どもたちとかわり視野を広く持つことが大切だと思う。その機会になるから。
- ・サマスクの参加者が学会員となり運営スタッフとして携わり始めるなど、事業の継続性が形成されつつある。
- ・受講した世代がサポーターになる良い循環が芽生えているが、まだ少数なのが現状。
- ・子供、その親だけでなく、地元自治体職員に対して、生の姿が見せられた。
- ・スタッフの人数を考えると、子供の参加人数がもっと増えると良いと思う。

今後の留意点

●**今後、学術団体が参画して実施していく上で、**

どのようなことに留意していけば良いか(内容ごとに整理)

- ①学会事業としての**報連相**
- ②**継続**すること
- ③**スタッフ育成**をもっと意識する
- ④**教育の場としての視点**を大切に
- ⑤もっと**すそ野を広げる**意識を
- ⑥**将来ビジョン**の検討を
- ⑦もっと**地元とともに、身近な**場所に
- ⑧**参加者のフォロー**を
- ⑨**テーマ**をもっと考えて

▶ 今年はどうだったの？ 今年度は8月6日から7日に**長野県木曽町・王滝村**で実施

第24回地震火山地質こどもサマースクール

御嶽山はなぜ大きいのか？

サマースクールの1番の決まり事
大人はこどもに教えてはいけません。
こどもたちが気付くのが大事！



★**こどもたちが御嶽山のナゾを2日間で解き明かす**

- ①御嶽山はなぜ大きいのか。どうやって大きくなったのか。これから大きくなるのか。
- ②御嶽山は他の火山とどう違う？特徴や魅力を見つけよう。
- ③これから、御嶽山の近くで私たちはどのように暮らそう？私たちの楽しみ方、暮らし方、備え方について提案しよう。

講師	
実行委員長 土井恵治	土佐清水ジオパーク推進協議会事務局 長野県火山対策総合アドバイザー
講師 竹下欣宏	信州大学
講師 金幸隆	名古屋大学
講師 川上明宏	御嶽山火山マイスター
講師 寺川寿子	名古屋大学
講師 堀井雅恵	名古屋大学
講師 道家涼介	弘前大学

★**見て、聞いて、調べて、そして考える**

● 御嶽山周辺地域のゆかりある名前がついた6つの班に分かれてヒミツを解き明かす！



木曽川親水公園 フィールドで発見する！ 木曽馬の里 新滝

地面の表面の模様は？ 九蔵峠 開田高原の不思議な地形？ どうして斜面に滝がある？

王滝川の河原 どんな石がある？ 何種類ある？

「同じ方向にしましよ」 「どこまでが御嶽山？」 「外での実験おもしろい」

専門家のお話を聞いて質問する！

岩のお話 くらしのお話 「噴火の前と後で違う種類の地震があったの?！」

夜のお話

植物・生き物のお話 火山のお話

「御嶽山で名前がつけられた植物がある」 「富士山と御嶽山を比べると…」 御嶽山とうまく付き合うためには？ 火山防災ワークショップ

火山実験で想像力を働かせる！



立体的に観察しよう



たくさんの土砂を谷に流そう



ネバネバ溶岩が流れたら？



「御嶽山でしか見られない景色だね」

「実験のこれがこれだったのか！」

見たこと、聞いたこと、実験したこと

をヒントに考える！

よい発言や質問にはカードがもらえるよ

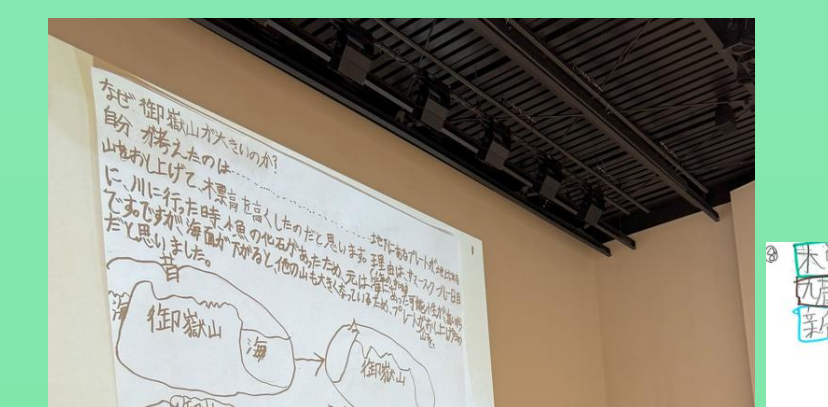


★発表

まずはみんなで作戦会議！



いざ、発表本番！



「わからないことを解明する楽しさがある」

「お山は、一山百薬!!」

「火口がたくさんあるし、雷鳥が住みやすい山の形」

「海の下にある地形が山の上にあった。またこれが起こると山が高くなるから大きくなる」練乳実験で練乳の動きが止まった時、溶岩っぽい地形になった。溶岩で山が盛り上がるから山は大きくなる

「たくさん噴火したからもう噴火しない。あとは削れて小さくなる」



御嶽山はこれから大きくなるのか？



★**こどもたちの発表への講評**

川で拾った石ころが御嶽山の欠片だと気が付いてくれた。火山は、削られて小さくなっているが、噴火で大きくもなっていると気づくことができてよかった。

経験が身を守る行動につながると思う。自分の住む地域でも、身近にどんなものがあるか知ることが、命を守ることにつながる。ぜひこれからも続けてほしい。

「分らないことを調べて分かった時の喜びは何物にも代えがたい。これからも続けてほしい。」



★**アンケート結果一部抜粋**

「今までは趣味にしようと思ったけれど、仕事にしてみてもいいと思えた」「川に落ちている石から色々なことがわかって学べた」「チームで協力しながらカードを集め、お山のことが楽しく知れた」「火山1つにつき火口1つの考えが変わった」「噴火災害が身近にあり、共存するしかない」と諦めていたが、専門の人に聞いて、いろんな対策の仕方がわかった」

▶ 来年は？ **2026年は宮城県気仙沼市**で実施予定

三陸ジオパークとともに、地震・津波のメカニズムに着目したプログラムを準備中。

▶ 持続可能なサマースクールの実施にむけて

- ①**報連相・宣伝**
 - ・説明の場を大事にする。
 - ・活動に理解を示していただけよう、宣伝方法を模索していく。
- ②**後継者問題**
 - ・学術側の中心メンバーの高齢化(40代後半以上が多い)
 - ・学生など若手スタッフも増えてきているが、継続性に課題あり。
- ③**内容決め、開催地側との調整**
 - ・開催地側にプログラム内容の意向を汲み取り切れないことがある。
 - ・早めに企画、準備をし、調整する機会を設ける。